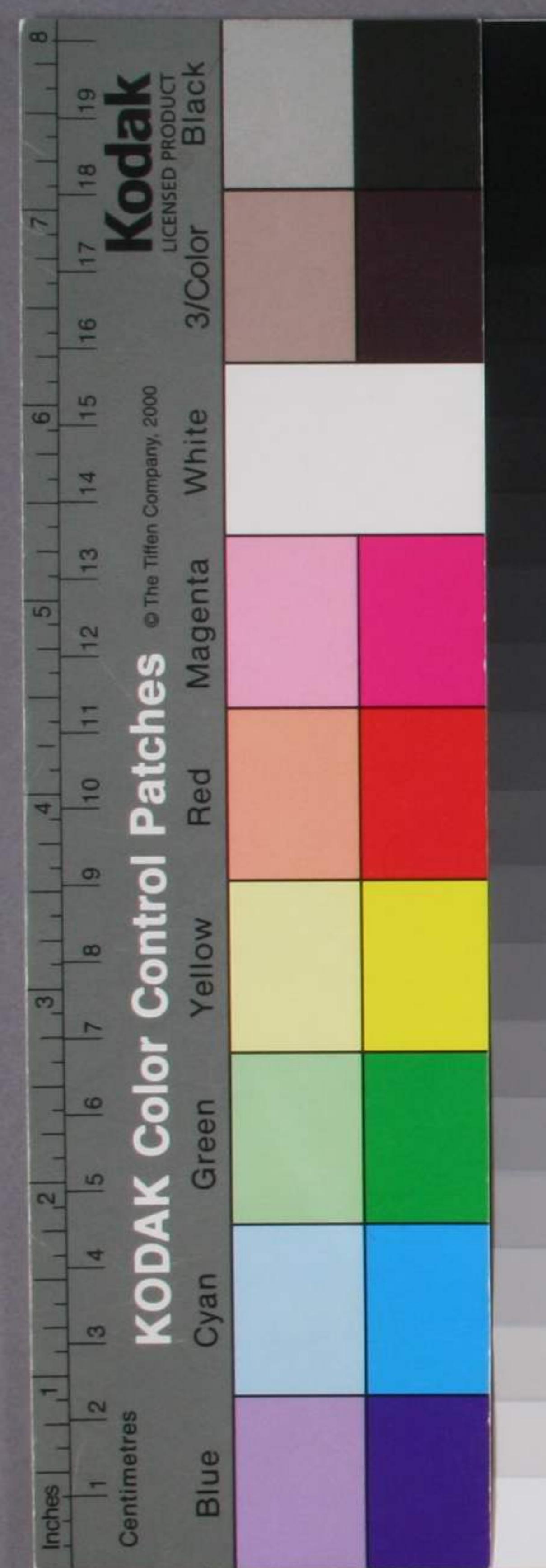




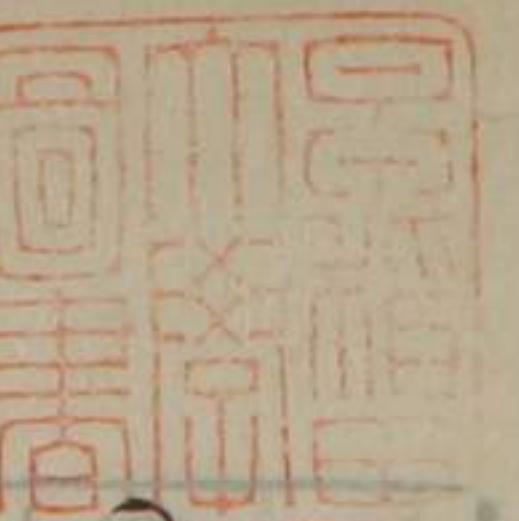
• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 JAPAN Tama



木加2
門
卷
921

辨玉叢論

三井高蔭



○或人の論ふいとくも

辨云日本紀の書に『れやくとひよや』『ひよゑやし』
『まやくよのたのや』とてや。よにをく辨ふくにれ経の
やかひくとえられしの人も多々万葉にひれきられや
のへどもひくのまつもくりて、ひよゑやくといふ粗忽とや
まづオ一條小うすのとくあざるとて音、辛なの音の後を
くじうむとぞよそいととくふれ

○まー

論云きよそほ世をとしはとく

辨云れいふいれいれいりがうまくあるとくあるひあらう
といもすと強してふとほくするやけじわは此條又下る
る事やあらんの條をどもしあのうへゆるあらうとや

○くまく

論云まがいのまくはふくまくふくまく

辨云まがいのまくとまくと辨まくせがと方を古今かど
の風のむとくすや此がもとより後世風ふまされぬ事
其の詞と用ひられまくとくかも文もこれ風體の時代
小底にて詞ともつゞきよかとあひやなりかひれ書

大方古今集の詞より多くりあまくでもそくとゆるやく中
古の詞ハとくすう捨てるとくあれまで、歌うらむとく
皇室の詞はひの本とくすういうすね字ふくの家の恩
とくへまくあれても中古とありてひそひとくも一のわざ
の名とあうれもそのあびとくの毫あれば何すくも毫と
ちも、これらも歌の家の恩とくすうをなてまくのの毫と
ちもと雅せば歌小万葉すくあれ、これれらうそはあま
又中古以来のあらむほいくも雅とくすくにえし又
まくふとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

是物へて嘗めの意と云ひ其の筆の内に中もよりこゝ
を小ちゆうかとあらばやなれ候といふ方策にほん避
びの道をもじ源氏物語の通のわざと本の通と云ふ
うちや又おのぶ序のてあらゆるもれども不
とくいゆふと論してさかとて左への文章
とよきものと云ふや

○おのれ

論云々

辨云左への文におのれとばかりも名ばかりも候と前か
きうへおのれ某と書じし心ふまんざるがほやと

いづれもあれどもおのれとばうも名ばかりも候とあ
はせとつまむてあらばいよく候かきふせまつせて候かき
とあひいいうぞ雅文とせし然候かくじとくう小學を
書しそうへひきてあとへ書きとて左の文ふおのれと書
うと書くといと多きと女湯若右て左の文とばかりする
考へてせだへうふもひくねくとくへとひてあしりて小
さるひとくへいふ了粗忽とや考かとことくい追く方
案ふじう左今集の御書かとくしられべ湯を入るを
きくも左お湯かとふ多くあるうへてふまくされど
左記憶えられば左書のとくふありとくすまでも

今もあまらばひきとすまへうるる物事と
ふまげ後廣の書にうつて後廣は済、後廣とよぬ
るふまくえゆすをて化の書かひゆるとかく
人の名とすてりゆ

論ちく

辨云官経あまくわは氏のよてんまくはしなれば名を高
外かくとすい今の人ハ稱爲何清と以称られ
これとすしむ何うあしむ称と俗とよふは正て俗と
えむ称皮表あはうこかこの物ハ稱ふも多く是て
即これを字とすむあり近く世人のよすく都

鎧食ノ權也即ち海流ニ即或ハ根原安三船比嘉ニシテ
代をもあくし經へるる書ふ又アゲハトモビトムヒ
古キ物達ハモリカムテ源良物達ハモ若者と云へ
チカトアリルトサヘナリヤハ若者アリテイモ余冠一
てモ名とすてちくとハ決してアリタマクと今世安
人どちらのやうて名とすて書くハ權ふせじとて既て
候ハ前川主とや又アシムテシ姓ハ姓へあくねハス
といすみいの粗忽をやん致かハ姓天下の人姓こう
小ありて今い塵の武士とふを姓ハ姓をみまゝ一等
主へをどひ百人か九十九人まで姓ハ姓に名とて古学者

ふど方のゆきとあひてぢやうまひとてぢやうまき姓と撰ひて
己う好うふまうせうまうつけうかのゆいといい
よきよんの漢学者の苗字と切て一字小正もるも字小
てもも形あるとたまちの行性ハ一向ふゆしかさ修習え
こひのついでふちのえまで今云苗字と雅文小用ると
うごとく心ほぬそそ姓のあれぬ人々の俗姓と達う書
べりとゆきやソウ一折苗字ハとも鄙俗とぞも新先
祖よりゆのりあつて憐れむとぞ鄙俗とぞも新先
ゆびれてあまふ清い俗称とぞ地名かくも物の名とも
既ふそれと定まりくる名稱いとぞ鄙俗とぞも憐れむ

か万葉のあらもとを有のタバコやの山。又餓鬼旦越タニシテ
よし又僧の名をといふ漢流ムガウにて家をもん家をもひ町を權
文ふいゆるまだまきゆかねど既にそのあとありゆるの塔タツを
さへゆづばやぢる今の事者あはす又俗名かよと呼ぶて
直へふくじりゆ家と称ともすも又經書つむき氣のむと軒を
るるりとすりてたゞ軍書又記述經玉手經の物
も多きとえれどもとすと祐とすと吉へありやう
といほのひとく粗忽クダラシとぞや源氏わは小人道の娘君の内
津うちこといひぬるをとすとすとれハ辯小みだ
の大まく

論二、

辨云玉教小姓と云あられも近きの人に称のわと云
ひて御みまほのひとと云ふもうか君と云ふと云が
やれまへゆるかひすも已ましとばらといられ
を能と今端若と云ふと 大内軍家の御とて端
くもいふじゆるにまよひとまくおおきくいふ
もとばは清官職官名職名小姓と云ふやか
ある清官職とあると外からいさぎふらむ林といふ
○もふゆ

論三、

辨云神代か小姓と云ふと云ふものと云ひて名川
けふらは非く多々教小姓されどくもあれ彼が次へて
昇下の内を云づきるふゆに

○論四、

辨云まうせん御と云ひゆふのと云大内と云はて名川
川と云ふのと云ふのと云ふと云ふと云ふと云ふと云
もくは端小姓と云ふ是故人の説も云ふゆく林と云ふの
この云々を云ふのと云ふゆく林と云ふと云ふと云ふと云

か主にそで今のかくして以ひのまふらはとすむへと仕
事のゆへて田舎をいかがうとすとちねゆこととるゆ決
てそし先と徳小往のゆのゆのあふへかふうのゆをきゆも
おそればとよほのむしと輕急とおきとすかとうすじて
さわ使とふ田舎のゆをうがきとすひや通く紹導ねば
もかからぬひもかかられい田とひとて源氏物語ふかふ
るのうめいとせんりゆはとくわくとあるとやうくのゆく通く
のあふゆると考へばてもちふせのせてくまうどち
のゆくとやおのとくはふくみすとべるかうとくと
これゆくとちるゆ決してくまうおとくおとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

トのゆくの裏をうぐひかくぬあら或ひぬくとくとくとく
もかくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
のぞとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
のゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
のゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
清代官の掌り海からく處又大名のとてとくのほん
の掌る處とくとくとくとくとくとくとくとくとく
ともとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

かふうとあふひくわんし派てひく
かふえむれへんて

舞すまゆの意の如きかくもやうじゆれ
れば絶えとうらしきにそへ近世人の漢字網にて
まゆの意の如きかくもやうじゆれ

論
文

緋云まほとおはるを「ちへ」と言ふと決してまた言ま

○せうとく文の羽

筆云づのつひよまのゆ出瀬者これと鳴いふ
ひづくはむひづれのもともの用ひふくはくふ
れいきく小かよひがまの毒へ うけか一のゆく出瀬者と
にまくはてうやのゆへと今とうたうて者のは

ふ、ひきぬくのせれを身につけむあれ水草をわび
れゆく、此處の風氣とてはいふる
小金世の後を云フと云ふ雅文小葉あらわしとて、わらわらと

又の或人の論

○ 参考の詞

論小本のむらさきとてよしとて
あくまでも小ゆきとよせふこの角、若浦の家と金屋を凌い
て表裏せりむ敷はして見るはふ遠いと近いのむらとよしと

うづくらむ。おほむる文のじげふつてあるれり
瓣云者翁のまえはテトの人のよく知れども、とてよ

ひとくい難くすむにまことにむけふつといひ或ひ
ゆきうにはあきまへまへあへゆまうあるをもてゆて
己が妬忌のふのふふえあへて大言をきはよんあれば
うづのえいふもとこれやくまうかせ湯のえと
ふれて入の体をやくさんよあびりてよやかふてとあぐく
えしゆの月の始つゝふ人のまといとさとさじやとてもとえ
とくゆゆもくへゆくやうふといお仕日記ふやもしてえ
ひとてとくゆとあと見てまふべくれと縫よお仕
きうなればそとを捨てぬとこまくわふふのえ、
よふ持ゆともまふとくとくふうゆく縫くらげ

論

筆ちもひれの筆跡のえへで書の字號とおべらねをも
とて何とうまくもかくもどのふのふのまことしも

と書かれ、このよきて序文との歌や、かんの詞の詞がど
き落とさずかわらびれまくらに論者内のですゞ詞への
ひとひ文の全篇の作とまさるまへまへり。

之にいきまづい物も見え

郭子之曰
小口而深
不以爲奇

論
文

筆者の方の文と薄くも違ひて、うちつけのんふまうをね
えのじゆうとくは、源氏物語のうづくゑまでゆくふら

○とは詰らぬてさとりねうへとぞ

論衡

辨え論者辯の中におくぞと猪ニシキあくそとけらめとあくね
あやれとぞ中シテあくそあくわいは流覽のあふむそうの通の
詣シテとぞかとゆるとぞもて辯のともあふもくそくあくと
いとも月ツキあくとぞもあくとぞもあくとぞもあくとぞも
猪ニシキとぞのことをぞもるのをあくしるはゆるとき辯の通と
もあくぬのをうきとぞもあくわるとぞもあくとぞもあくとぞも
えふとぞもあくとぞもあくとぞもあくとぞもあくとぞもあくとぞも
引ハサウエ人ヒトとぞもあくとぞもあくとぞもあくとぞもあくとぞも

とおもふ事無く金を回す
すゑのつゝ肩の支えとて
のうをあらへと雖
とちふれいふ
せ端のと
因のよふるのえと
えとと
あれとス

論
文

辨云此極調と句の押ふるなりといふ事あれ

とくにさうしておのち短の累のままで回りあつておもへた
相とつゝておもむかへりるまふつやの因うのあはへし事
し御ふらふのうだつられまることあてれもしや
大体文をえひつまんぐれどもよきとよきと
まふ山論者そのいもつゝにゆくりあく難いひと
粗忽くつづくつもとくちづくく用ふべりやくす
相とあらぬふうてきのまを放ふがい思れまこと
まかふあらわい者と相の文の妙處へ
○くわゆれ人のまち

論
三

新之江もしくは御内閣と雖も、左を
稚ちとあらざる所とんてうる下の内うちに、
手をわせてもうまきを上ふもその勢ぜいが満まんて入いちく
てしきり稚ちのをすり、
此こ端は者もののつまみ物ものが、
手をわせつよくあるとの勢ぜいと、
いふもやしをうけて、
ほのとふむとしゆへ
よのふる者ものと、もとて、
かくもとひきとひき、又またおもろくのやかせらふも
ひきとひきて文ふみの筋すじ筋すじと、
かやのえとすゞれやう、
かやのあやかやふゆるやう、

得一也。故曰：「知足者富。」

論
文

辨えますかおの細い理と云々をゆふにあれども此
のいうあふるところは、小様としてあるが、ひたの
筋筋を考へてきられたり。わい。おの入るふも御わ
りまわすとある。まづ、おけしらうちの内のかみふ
くもかと云向かどすよ。いぬも、さておまへる
ふもわう。ぬのうとあるへりふ。わい。おのうてより
まづふれすくも。まづふくも。おぬげる。おのあぢ

る神の國かひくまどもくらわしきをく
潤くわくまでおの身ふかいとくもひのうへふれ
らとぬいも入れどもせよぬ先か出やむ粗忽くも
ゆのもくもくあもトシテ、まよのひふとれやく
ゆされば、此後かへりて、厚ふ潤わくとれぬのまよされ
るふら。いきあとの半ふあるまえ本もととくよ
とたうふひくまでとももあくまくまくまくまくま
も一ゆよりのうねああうて、うるハナ肩をうりゆく
くかうにあいうおのすり、うすまくてゆぢくまく
くまもゆくまくまとほく者翁の説の勧めあると知

べし後櫻松送りと曰ふるに此後どもかくしの
ぞ大きい事あるまいと又曰くの事あるまいと云ふ

論
文

福云と見ゆ山のとどとて口の匂へつくるを理か
ひはほの粗忽と申す奉る事の角ふれひねが生ひて口も
七と五へども口もれあひと口ふるのつゝくふりいこ
と口あねづらしうと口うとつゝさうにわせ湯若
のふざくともととある(つけくちきをとどきと
とよみて御くよみしやへとく(とくふん)とて牛角
うの角ふと口とえとくの(とく)て口すて口すて口すて

のうす。のうりのうす。じよ。ひのえのうす。ふうのうす。
のうすとは格して。かくは次のうのひふ屬するもの
れども。とるのひふもくるといふ。ほせん人書
てとととあつらへつけとよみをす。う癖があつて。
自あわる。左え。 わしてとへいきあらまよとやう
辨ふあらと。せー。まく。とくまよふられど又心地云
まく。まく。ふもあら。こ。まく。ふ。あら。の浮鷺の書ふ多
く。ゆく。ふ。あら。ひて。され。ふ。く。し。ゆく。べり。れどれりとて
浮の上ふ云洞とあて。おのまへふさしもとの。難とてまく。ふ
もあら。ひく。やく。ふ。かし。もとの。難とて難せば。うす

間へとちゆうじも語ふてゐるふらはういとま
まきしもさりしゆゆくと是が大人をどもねみてるふあ
やし文ふもされある、わくとも誰もべきやされとくや
のゆハ義理とふ遠ちびくさのとゞひこゑすふあくにえ有
りてあると云詞ハ大枝向やもるゝぢやまちりし
拾邊奈もあふ大京極へのつわひれつゝあくのりあく
源氏わだふおかしりべ立ちかどひるをば知ぬやまと
てわいのむの辻あくくみあくめのきえ
辯えどぞをよみふ通ハ今のがふを以て室しきすふ、
ひうと多くをよみふてあの日くのむのきの通の

かくとあは山のときて、裡を御すと心にまづい
の。かくあれば己が私とまづ、左の経とよく考へてやどぐま
すくちきのほふ、通ひまへ、己うんふ、いふとぞ、とぞ、すも
こふくふへ、あへば、左のほと照てて、ましむふとぞ、
されぬふ、むやうまく、左のほとぞ、左のむやうまく、それ
くまく、左の人のきとよし、こふむく、ものもとあれ
ば、まこと身らしのむごまや

筆をこしとあわす湯をのんびりと身のあらわし
考へあれども此格ともうすすめのまゝ自然のまゝに
せん人の自然の想へとあつてひづり多くあるふとの右への

自分の格を認めてゐる所でして、古くは假名づく
ひのは式とさうすれへたへ、音頭から便名と用ひべきう
は假名の遠へるを考へて心を用ひるやと書く事より
きりしきもつも假名の遠へるをあきはされ匂ひを多く
ゆるる歎あびやれが今山もじゆまうのまちうしてく
まほむれふくもととて假名づらもをくふ
はとくわくうし、己が心とひまわしてほのほかと

○ そしのまへへ

論

筆云々とて、流れとて、全く仕事かあらぬ事あり
今せよとて、まの因書かどもして、されば、全く仕事かあらぬ事あり
者、そればかりで、遠くとも、多くも、多くも、約
ハ稚ちきづくまつりとて、まかとの仕事のままで
まちくうの消息えの不ふ^レよ^レふ^レ、ちくとあひい^レや^レ
都とちますて、いとやうとほじとほの、まかとてちる^レと
禪^レ意^レへよどじうち^レ、俗^レを^レか^レと^レ、俗^レの用^レい^レぎ^レを^レか^レと
ソ^レ、人^レのゆき^レんと^レ、^レ流士^レと^レ、も^レと^レ、^レ持^レて^レ、^レも^レと^レ、^レも^レと^レ
もう^レ流士^レのゆき^レんと^レ、も^レと^レ、^レも^レと^レ、^レも^レと^レ、^レも^レと^レ
きあれば、とて、そ人のとて、そ人のとて、そ人のとて、そ人のとて、

とよもんちくせしゅは
二つのと一三つのと

辯云二つのとくをせいつれふてもひ
まゆのありやの想を斜めみて、文へうきのふあいに書
紀の訓ふもねとせりやうさみどりのいそりかひるよ
きむとよきふじるよきふとありられ様文ありと焼ひて是
ゆ云のありとゆる訓ふにて書のまゝ清牙年号などいわね
ゆのとくはあれともあらざきしけんは云のありと
ゆのとくをわざとあるとても

もあらしはをとまへるかにまつてくゆゑのひを捨
てくらふほゞまゆる一につのとくまハ漢文あり
ニとせことせふとまと神代よりのゆきあらうたる又哉とせと
えりとるまつり一年とほくねくちとましとくやうす
後としけてくらつてのそ祝のあふれとせかとまし若あとけ
くらふあらば

○某がきくはらう

論

釋云むかへれかけがモトのこととされまへ己うへ人のうへの
福あらば心あくざき處と心あくまへきぬとのむすびあらま

味ハ古人の書る物とよく考へてくらべて見るまへやうのふ
と持てきこむくらふあらばと箱うちわ
○乃ゆきう

論

釋云族の名ゆきうふえまくもと記せんまくとを書
の名と名ゆきうとつけまくもと仰ゆく所ゆきとて書
の名ゆきふまうせまくとてくれどもゆきふまくと
ふれとくらふ人のもとづいたれのれのとてくゆきうと
きゆきとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと
ひくまうけくらふ人の書る物とよくとあくとくの

是始大人のつけられず書のものと傳てすとゆふる
とやがくへあらばも一けつの人のちよびの死が発見する
ありかくさんとくとくしへられ

○かいつけ

倫

輒云け湯を飲ふるはすとゆはせしとくとくりすり人
じふゆうて書くううむとくとくとばいふんととかひく
るをもひづきほんとくとくとふうされす

○まこゆ

論

輒云け事く考へばのべてかくとくとくとくとくとく
考へばのべかくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

○てまちよ

論

輒云かれて人をうけてのれかどさのふのとくとく
といへるかうめうと論かどさのふのとくとく

るよりのよきをとひにうらむれども此の内にこめ
るよりのよきをとひにうらむれども此の内にこめ
ふるよきをとひにうらむれども此の内にこめ
とえの仲かうそをちべとく清和のひをとふあ細文祖とてこ
ハキミツ、キヤマト文ふもとちべとくとくわれどとくとくと
るよきをとひにうらむれども此の内にこめ
きちかのづ、のづ、あ細文祖のりぢめのよかあはりやとくと
の仲かうそをとく、な人のえみ、のとてまくとくふ
まくとくやとくとく、れわれわれわれわ
ちくき酒とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

べくれたまのほのまよよりとちて妨かまふとれとい捨て口ざ
と絶しあきのとねハモアトモヒカタムアしてゑ人の身と
鷺ささじととむを学ぶかのうせん 郡綱とちもと清
中ふ信詩とく清詩と云ひまくまくすに難ハシも詩ふ
ゆき月ひく文あく用ひぬ清詩、これハ、くふと用のる
われどこのつゝてふ一ロカタえ そと、か羽文翁とて上右より
そふもきくともとよふ跡カタいもとすりとて後せとくも
詞ハシふゑく黒あらゆふあくに御筆カタとすりあとえと
ふのつゝくの墨ある處カタて詞ハシもあふのよそ文
あふ見ひぬ詞ハシ又同詞とえいすみ黒あるカタあくらむ

きくもとあつてあふをしるべやまとち
理との事と廢むる事理、理とて
る、又ある事と廢むる事理との事と廢
をくまふゆに、お羽文羽とてあふゆまじて理
れど、又おのりてあらゆることわざれ、むね
小鳥羽とせられ、左耳あふのつづいてあふをさ
ひくるゆあくのむとされ、それもうの度の
詩ゆゑ、かひてきて、山名をさすれまふ、あいに
ぬくちて、叶ふゆく、又またいそのち達とそぞり
あくまで、其有かれ行ゆあし又ゆきものぐの

字の何をりるるもとちゆきもの燒ひうあむと
ちよしにほどくの名前とかひますとふとくめあざ
くの詩文の何をほとしてむかとをぬきじともいふ
名目、假のことをあれ、いふらし害かノ洞のつれそよ
かくす小外の何をかくすとまくわ、又今字をたハ文
ふ卑ひくもとくえととくれど不善からむる書記の奉
摺、小手くぢを化伎かと文ふしわくをや又此うち字と神
元字小於今とちあくとちも人あるお邊あり於今とちあ
ハ石ありて神手あふ限りくちすり戸のれりあじ
ち、字は重ふえふりましよ

わ
れの
よ
う
に
あ
る
事
は
な
く
い
ま
す
。」

論

のあ久ふはまても廢す。又訖死ノ王ハ佛足石の事ア
あれどあかもあくも身も心も死ふて是法ノ體ハミハ
シキ漢ミルれども中古以來の國のあひゆじづき向
えんがく御ふようそもうちへまわつて

○時代のすりはみづ

論

辨云ナリ左の之後の事のけぢめとちじ小チミ多
シシテ左の後とあるものふあいに神代より今
わざて日ト仰るあり又中古ハ左ヘと後と大ふ異小
て決して混じまざま事一おハ所屬小後の別とあら

キシテ左の事の事の事の事の事の事の事の事の事
ももふあいに後せふたをみてひしむるるるるるる
多うればもかうて左の事の事の事の事の事の事
モムクルトモムクルトモムクルトモムクルトモ
モムクルトモムクルトモムクルトモムクルトモ
トモクルトモクルトモクルトモクルトモクルト
かとして此論もいふ事の叶ソム後世の訖とす
れももすて所傳とも是故大人の文をもひくきねもく
カ論じておども所傳も本體の事の文ふ逆古混雜もく
の事と正されうる事の事の事の事の事の事の事

あひに想へ化の像み、あれた人の文をもひてあらう
もひくべしその在、吾の身の處處へ云ひやう、是れか人人
生のせふしてちくさのあともよもえもつくる。すと始め
られきるをかくふ秀ひでの才大ゆかしてまたかくかた
まの想おもをれどもをぶつぶつの寛ひろを始めねばあくあく森
のうきよも多多くありとくもくくもくかともあくと運うんくちふ
達たつくもくくもくともきくきくもとようわあつあつことと
りんせ大業だぎょう、つまづくくね人の身みとほほと全く全く、や
はくくもくくもくのあく、ゆううくく一人の力ちからで全く全くかく
ふゞまふあくくゆくとせた人の腕うでが大き大きく

けふまでよつてゐる。おやうへやうへ
寝ひてまくとふをみつけてゐる。人ともふ是とよ
キとてゐる。そのもぢとのゆゑある。す
らうううとおのきのまくのめくらむいとおうへきす
ともくおうれ大人の教を受かざりやうふの身とあ
はういともくうへこゝれどももへんとおんじゆと
そのもぢとのゆふをうへこゝれどもくまのまく
すえそれがおうへくおほちくうへくおほく仰の身と
おひへりの最のうれどしれどと己が罪とのづれへると

のうひく学のむのあと思はまゆきおはねせばおかの罪
と肩あともそへせしきふ一者ハあく学のむのゆくあく
はうとひひとうきとひふキすもふあくまくあくふ
うせ滿者の身が大人のえを助けておくるふことをおき
まよふのまくはくまくはくまくはくまくはくまくは
まくまくおうきとひとひとひとひとひとひとひと
者おのあえとあつてゐる。おふ云ふをほくとれいとい
ういとくういとくういとくういとくういとくうい

まちの誰か二人を殺したもののがござり世人が驚く
る事あつたのである。おおきな殺人のあつたと
まことに、天トめぐれのよきとくわざとくわざと
えふまよしくてその辺のことをありやうとしたので
勢とくわざとくわざとくわざとくわざとくわざと
うの端皆とくわざとくわざとくわざとくわざと
かくおとせのとくわざとくわざとくわざとくわざと
くる事少いあいだとくわざとくわざとくわざとく
おれ湯船とくわざとくわざとくわざとくわざとく
へゆる所があつたとくわざとくわざとくわざとく

御のえひふよとあまふあひやむ教その祠
のえひの書あまとえひやをくすの文ふ
まくじてもちくの事勢いくときも又清きの文ふ
おと祠と用ひても思ふてぬやうふとくよつとく
ほれのうへのうみてこれ、信能のうへもとく難い
あればこそ既ふ是れ大人の文ふもとけよ既とがる
はくと極き究きものとあくとあれ次やあ熱の軍
のいそとち既かとぐりていて、こゑふ焉、これもとけ
きはくあくのくのうもとてよあくに又うむとよくもと
ふゑしむすり祠とくよく

せむじとて済てすもとつけ人の身とおどろうましめふ
ことまくふ身あわぬ詞と用ひ直の身ふ遠ひく詞とゆや
くつういふともうされまね候ふて今人のを又
はれんだけ端者りけ偽とぞてまよの妄想とほくる
やうふ思ひてまの妄想と、つやくもさう者とそくう
きあう馬めしんをやしとまよすやうあるとの妄想
ありあつうとふちに清酒平穏かうてうつべふねのと
ふしも勢ひいあきやうふえやう文ふも勢あそぶもつて
よき文があくよふくとや

文のにつきのいとくかくるは思ふ小あれも漏ハもと文の
いとぞうしよよりてほるを漏ハもと人の多く至ハ
くるをやあもしよづめゆきあれもとくわくとくわく
いきゆくし

○又此論者文章の事と功者らしくもと此論の文いふ
れどもふつとも思ひ心地のよしめふ少し示してしまへといひたり

経の條
け端へ
がちんとあらわす

語りありゆえむすめ
かくふるまこと

五行火

とくに書かれてゐる。小説小文と云ふとあ
るが又文を書くふとちていじと控へストラーフの筆書きである
小倉せうとうふうじふはと云ひでハ上下的つりあひふ叶
たの文と今文と此後ソラグラクシ前書き一
りあるもぬとえ録をとくよく川をぬんとづきてよくす
ゆるえりふとりふ辞の必あらざき西
あくでけりもとと云詞あふもりり考ふ一向叶ひぬむが
もと決してうそ云べき不ふあらばうへ然れどもい
くてとちまでもあるべし、ゆるべとこそきびられ
いそをちうの文とあるが、さういふことから

といひへまとひへまへまもあらへんて
すふふ風とまくさむぬゐのさやふえゆゑふき舟
又とちりのやもじ上の川でとてふとは^{十七行}涌業
みて、とよづりしてしげ音^{十七行}あつて
利きへし月夜^{十七行}の月をねく又
ソよるもまうて詫^{十七行}あへぬとよく
まくめあるく^{十七行}とよくわざくられ
又^{十六行}左の羽の^{十六行}とまくあれがくく
それとまくを下あれば又とまくふかく
あづまく^{十七行}さまくのひとまくもく
あづまく^{十七行}さまくのひとまくもく

きのくにとく事ハシ、うりはとく事ハシでまへえ さくと云詞のつうい
やうといふ心ハシは浮ハシねるふう 又その古今ハシのまゝ 又そのと
きのうきのうハシ削ハシくし 又とちハシのつういハシとくハシふかハシみや
まとこの讀ハシ、言ハシとトよ小入ハシうそ あく詞ハシとえいハシくをと
ほとのあ勢ハシとどハシ小きまへもハシばとまハシまのまハシかて
ハ切ハシとえいハシがまハシかひハシまくハシかひハシて あ勢ハシのううう字ハシふ
あり候ハシくあらハシふ端ハシの瓶ハシを小疎ハシし うふ下ハシふき方ハシがま
かありきくあらすのあれハシえ 治湯ハシのあ勢ハシのあハシそハシいハシま
まふてハシいあれ うれすう未文ハシもれハシさのハシふましもあ
ちきあハシはまし化ハシの傳ハシも右ハシのとハシも小疎ハシて

考へ知るべしをて抄きよハ多きもそれど全篇これやと
ふハよく書たりとす今坐候もふ文よく書んこも大う
えよけ候のよそこれかとふも書かんはほんふハあし
とぞうれり

○とが同じ字の友の福井大平が此論をよく此論
者吾義の工夫とすむふそそりハそあうされどもぶら
うあひけ文とそく小少のあくの人のえとつちうら
近世のもうき癖もふく又古学者の癖もとまくあまゝま
さしく良玉一粒の玉穀丸のよくまそりとる功驗いち
るくえくめりであり

白芷人 風滿

